

大自然が解散しちゃってさ

尾代 余音

ダウ 90000 の蓮見氏が発言した「お笑いは流行っていない」という言葉は、お笑い界隈で一種のムーブメントとなった。やや誇大な表現に思えるが、同時に頷かされる部分もある。私は生まれも育ちも関西で、知り合いにしても大抵は関西生まれ、ないし関西にしばらく根を下ろしている人々なのだがお笑い、とりわけあの芸人がどうだ、こうだという話を通じる相手はそれほど多くないし、賞レースにしたって、M-1はまだしもR-1、キングオブコント、THE W、ダブルインパクト、THE SECOND に至れば、これはもう通じる相手がほとんどいない。上方漫才大賞、ABCお笑いグランプリ、ツギクル芸人グランプリ、野菜-1グランプリ……とまあ諸々に存在するわけだが、こういうものが集団の話題に挙げられることはまずない。お笑い好きを自認する私でさえ、自ら口に出すことは少ない。共有できるテーマではないと認識しているからだ。お笑いの話題など、大抵はサシでの会話でちょいちょいと泡立つぐらいのものである。そう考えるとやはり、お笑いは別に流行っていないのかもしれない。

私がお笑いを好む理由は実に単純で、生きているあいだに笑っている時間は、多い方がいいに決まっているからだ。

そして私見であるがこの「笑う」は外発的——つまり「笑わされる」であってほしいのである。内発的な笑いも、もちろん結構なことだ。聞いているぶんには、ご機嫌なものだと思う。しかし私の場合、自力で笑うと後で必ず悔悟の念がやってくる。私のごときつまらない人間の思いつきで笑う私というのは、二重の意味でつまらない。つまらない自分で笑うつまらなさに、居たたまれなくなってしまう。これに関しては面白いか否かというよりも自尊心の多寡の問題であるのだが、ともかく、そういうわけだから板の上の英雄であるところの芸人に笑わされるというのは楽しい時間であると同時に、安心できる時間だということもできる。

そういえばお笑いを好む理由はもう一つあり、私という人間の会話能力がほぼほぼ芸人のやりとりによって培われてきたからだ。

会話がな家庭に一人っ子として生まれた私は、テレビやマンガを禁止された環境で育った。小説は読んでいたが、小説の会話というのは文字通り「本」として組み立てられており、ある意味でゴールから逆算されて完成されている部分がある。これで鍛えてしまうと、アドリブ力が身につかない。

だから私は結構な年齢まで会話の方法がわからなかった。愚鈍であった私に両親はよく怒鳴っていたので、それを真似してクラスメイトに怒鳴ったりして、先生に「それを止めろと言うてんねん」などと怒鳴り返され、本気で泣いたこともあった。

中学ぐらいになって我が家に、というか私の手元にノートパソコンがやってきた。テレビ

やマンガと違ってパソコンの使用は一切禁止されなかった。当時はまだ、教育目的のものとして認識されていたのだろう（というか実際、そういう謳文句で売りつけられたに違いない）。

あの頃のノートパソコンに、ストリーミング動画に耐えうる回線は備わっていなかったが、代わりにDVDドライブが搭載されていた。それで私は近所のレンタルショップに足繁く通い、お笑いのDVDをたっぷり借りて視聴するのを繰り返した。余所のものに対して使う言葉ではないが、それこそ「擦り切れるほど」観た。

それで私は会話能力を身につけた、となればスムーズだがそうではない。現実にはできあがったのは、芸人のネタを真似するだけのオウムである。

この頃の自分についてはあまり憶えていない。それはそうだ。そんな黒歴史をいちいち憶えていたら「生きているあいだは笑っていた方がいい」などは、とてもほざけない。実際にはそのあとに自分なりの実践、パロディ、失敗、失敗、試行錯誤、失敗、などを経てようやく現在地である。

もう一つ、アドリブ力を鍛えるのに欠かせなかったのがネット掲示板である。昨今、当時のネットの世界はモラルがなく最悪だったというような言説が流されがちなのだが、断じてそんなことはなかった（少なくとも今よりはマシだった）……と、いかにも老害らしく語気を強めて批判したいのだが、そうするとこの冊子が辞書レベルの分厚さになってしまうので今回は脇に置いておく。

そんなこんなで今ではすっかりコミュニケーション上手……になっていれば綺麗なのだが今のところ、ここにいるのは自尊心のないお笑い好きでしかない。会話にしたって、せいぜい「マシ」レベルだ。ただ私の気質からしてこれ以上の良策があったとは思えないので、まあ妥協しておくべきだろう。

お笑いは流行っていないかもしれない。しかし幼少期にテレビもマンガも禁止されていない。今でさえ小説などを書いている私からしてみれば、そもそも流行りに縁があったためしかない。総体としてのお笑いには尊敬にも似た恩がある。

これを書いている時点では、THE SECONDのグランプリファイナルが間近である。今年こそ金属バットが勝つのだろうか。黒帯にも頑張っしてほしい。ヤングが優勝するのも面白い。小さい頃から観ていたチャンプーハットの活躍も見物だ。

それにしても20世紀まで解散するとは思わなかったな〜。